

greetings
of the year
by the President

変化を進化へ、そして新しい価値の創造で 福島県民の医療と健康を、 世界の最先端の知見を活用して全力で支える

令和5年1月4日(水)、仕事始めにあたり、竹之下誠一理事長兼学長より、全職員を対象に、新年の挨拶がありました。本年度も、新型コロナウイルスの感染状況などを踏まえて、仕事始めの式を行わず動画での挨拶となりました。(以下抜粋)

新型コロナウイルス感染症による様々な影響を受けた中であっても、皆さんの献身的な御尽力のおかげで、基盤となる附属病院や会津医療センターの経営も安定した状況の下、学生を含め教職員一丸となって、「教育、研究及び医療」さらには「東日本大震災からの復興を医療と健康面から支える」という本学の使命を完遂することができました。ありがとうございました。

中でも、課題であった医学部使命に関しては、「高い倫理観と生涯にわたる探究心を持つ医師を養成し、世界に知を発信する」と策定することができました。

また、「本県の未来を担う子どもたちと女性に寄り添い歩む助産師を養成する」というスローガンの下、別科助産学専攻や大学院看護学研究科助産師コースの4月開設に向けた準備が整ったところであります。引き続き、ダイバーシティ推進に努め、学部横断的な医療人育成と研究支援に力を注ぎます。

特に、新設の保健科学部では、医学部・看護学部との連携によりチーム医療の授業を通して、視野の広いスペシャリストの育成に努め、さらにはキャリア形成のための大学院設置に向けた議論もスタートさせております。

次々に先端的研究成果が

また、ふくしま国際医療科学センターにおきましては、東日本大震災後の取組の中で確立し

た独自のタンパク質マイクロアレイ技術の活用により、新型コロナウイルス感染症に有効な抗体を会得するとともに、そこで得られたIgA抗体を利用したマスクなどの衛生用品の開発および市場への投入まで行くことができました。

さらに、アルファ線核種を利用したRI内用療法の世界で初めての臨床治験の開始など、先端的な研究成果を次々にあげることができました。

さて、本年は、会津医療センター開設10周年という節目の年です。そして、同時に浪江町に、創造的復興の中核拠点となる福島国際研究教育機構が設立され、本県の創生が本格的に始動する年でもあります。

これらは「東日本大震災からの復興を医療と健康の面から支える」という本学の使命が、新しいステージにステップアップします。新年にあたりそのことを私たちはしっかり理解しておかなければなりません。では、新しいステージとはどのようなものか。それは、福島県民の医療と健康を、世界の最先端の知見を活用して全力で支えること、です。

福島国際研究教育機構の 中核的役割を担う機関に

私たちは東日本大震災後から蓄積してきた研究成果や知見をフルに活かし、福島国際研究教育機構において中核的役割を担う機関の一つになります。そして、これまでにない新たな知見を創出し、世界に冠たる多くの機関と知の共有と人材交流を促進します。それは取りも直さず、世界の最先端の知見が福島にもたらされ、グローバル化への具体的な拠点を持つことに繋がります。

この機構を介して本学は世界とのつながり



竹之下誠一理事長兼学長

を一層強化し、より多くの最先端の知見や経験、ネットワーク、トレンドに至るまで吸収し、福島と県民、そして日本全体に還元していくことが可能になるのです。

このように、本年が新たなステージへ飛躍する重要な1年となることは間違いありません。

そのために皆さんには、これまでも折に触れ「変化を進化へ、そして新しい価値の創造」をスローガンとして、時代や社会情勢など取り巻く環境の変化に学内外と緊密に連携(アライアンス)し、しなやかに対応(レジリエンス)できる力が重要であるとお伝えしてきました。

そして、改めて、このことを強く認識いただき、本年が今後10年の本学のあり方を左右する大切な1年となることを強く意識し、広い視野と洞察力を持って、今年1年の仕事に当たってください。

私自身、皆様の奮起と奮闘に応えるよう、役員ならびに関係者と共に全力を尽くします。

挨拶の全文と動画は、
ホームページ
「学生・教職員の方へ」に
掲載しています。



国立台湾大学医学院と学術交流協定を締結

本学は、令和4年12月29日、台湾の台北市にある国立台湾大学(以下、台湾大学)医学院と、医学研究の共同プロジェクト等の更なる推進、学術セミナー等の共同開催、及び学生の交流促進を目的に学術交流協定を締結しました。

後藤新平に導かれた 医学院長の記念講演が契機

この協定の締結は、令和4年6月11日に開催された「福島県近代医学教育150年顕彰記念シンポジウム」での台湾大学医学院長の記念講演が契機となりました。

台湾大学は台湾屈指の国立の総合大学であり、世界的な評価も高い大学です。今後、



共同研究等で交流を深められることは、本学にとって大変意義深いことです。

調印式は、台湾大学で開催され、本学の挟間章博副理事長と台湾大学倪衍玄医学院院長(写真左の右側)が署名文書を交換しました。

台湾大学からは陳敏慧医学院副院長、陳佳慧教授、余明俊教授、詹迺立特別教授、鄭銘泰救急・災害医療主任医師、楊佑臻秘書、本学からは大戸斉総括副学長、細胞統合生理学講座小林大輔講師が陪席しました。

アメリカ・オハイオ州立大学との学術交流協定の更新



写真左からArnab Chakravarti教授と鈴木義行教授

令和4年10月27日に放射線腫瘍学講座鈴木義行教授がアメリカ・オハイオ州立大学医学部放射線腫瘍学講座を訪れ、2017年に締結した国際学術交流協定の更新について、5年間延長することで合意いたしました。

放射線治療学分野で全米トップクラスの実績を誇るオハイオ州立大学には、これまで、医学部6年生をBSL期間に派遣するなどの交流を続けて

きましたが、新型コロナウイルスの感染拡大にともない、この2年間は派遣を中止していました。

今回の訪問では、学生だけでなく、若手教員の(長期)派遣など、今後の更なる緊密な連携の推進について相互に確認いたしました。

令和5年度の学生及び若手研究者の派遣再開に向けて、「今後しっかり準備していきたい」と鈴木義行教授は意向を示しました。

ベルギー・アントワープ大学一行が本学教員らと福島第一原発を視察し交流

令和4年12月9日(金)、ベルギーのアントワープ大学(University of Ghent)のRik Van de Walle学長を含む一行が、本学との交流促進を目的に来福し、本学教員と東京電力福島第一原子力発電所を視察しました。原発見学の前には、医学部健康リスクコミュニケーション学講座田巻倫明教授と医学部放射線健康管理学講座の坪倉正治教授(写真上段)が現在の状況について説明

し、活発な質疑応答や意見交換が行われました。

福島第一原発の視察には、田巻教授、アミール偉助教、広報・国際連携室赤倉慶太氏が同行案内しました(写真下段)。アントワープ大学一行からは、「とても有意義で貴重な視察の機会であった」と感想があったとともに、同大学と本学との将来的な連携について検討していきたい旨のコメントがありました。



REPORT

第5回 高校生対象 法医学・病理学セミナー開催 ~アンナチュラルとフラジャイルの世界~



福島関東病理法医連携プログラム「つなぐ」の一環として、高校生対象のセミナーを令和4年12月10日に本学で開催しました。福島県、山形県、茨城県から、高校生15名が参加しました。

前半は、病理病態診断学講座橋本優子教授の指導のもと、高校生に病理学の医師になったつもりで、バーチャルスライドや顕微鏡で標本の観察を行い病理診断をどのように行っているか

を体験してもらいました。

後半は、法医学講座黒田直人教授より実際の症例をもとに法医診断がどのように出されるのかをディスカッションを交えて講演しました。

参加した高校生は、休み時間も標本を顕微鏡で観察したり、病理・法医学の関連図書を読み、先生方に積極的に質問していました。